2007年度 国内実地研修報告書

―長野県清内路村に学ぶ住民と役場で改える地域づくり―

Domestic Fieldwork Report 2007

Rural Development Management through Collaboration and Participation of Residents and Administration in Seinaiji Village, Nagano Prefecture

> 2008年3月 March 2008

名古屋大学大学院国際開発研究科
Graduate School of International Development
Nagoya University

2007年度 国内実地研修報告書

―長野県清内路村に学ぶ住民と役場で改える地域づくり―

Domestic Fieldwork Report 2007

Rural Development Management through Collaboration and Participation of Residents and Administration in Seinaiji Village, Nagano Prefecture

> 2008年3月 March 2008

名古屋大学大学院国際開発研究科
Graduate School of International Development
Nagoya University

はじめに

名古屋大学大学院国際開発研究科は、1990年代に日本政府開発援助額が世界的に上位を占めながら、国内にそのような援助に関わる人材育成の専門的プログラムが整備されていなかった背景の中、国際開発・国際協力分野における人材育成のために 1991年に設立された。設立当初より、開発協力の現場で活躍できる人材育成を目標として重視されてきた実践教育の一環として、1995年以降正規のカリキュラムとして国内実地研修(Domestic Fieldwork、略称 DFW)が実施されている。DFW は、1992年以降本研究科で実施されている海外実地研修(Overseas Fieldwork、略称 OFW)とあわせて相互補完的に国内外のフィールドを学生に経験させる機会となっている。

今年度の参加者は、日本人 5 名・留学生 20 名の合計 25 名であり、経済・行政・福祉・文化の 4 グループが設けられた。現地調査は、10 月 23 日から 25 日にかけて長野県清内路村で実施された。

なお、この DFW の目的は主に以下の 4 点にまとめられる。

- a) 「開発現場」を知ることの重要性を実感する。
- b) フィールド調査の基本的方法や姿勢、調査倫理などを習得する。
- c) 日本の地域開発をめぐる諸問題について学ぶ。途上国における開発問題を考える際の一つのモデルとして、地方行政、教育、農業、環境保護、産業、文化振興など、様々な分野における日本の町村レベルの開発問題への取り組みについての見聞を広める。
- d) 異なる社会経済的・文化的背景の学生によるグループ活動を通して、国際的環境における共同作業の経験を積む。

このような目的のために、参加者は、

- a) 事前研修(日本の農山村に関する概要・調査対象村振興係長櫻井健氏によるブリーフィング・JBIC 鹿野和子先生による日本の開発に関する講義)
- b) ワーキング・グループ (Working Group、略称 WG) 毎の調査準備
- c) 現地調査
- d) 結果報告会と報告書作成
- の四つの活動を実施している。本報告書はこれらの活動の成果を記したものである。

今年度の特徴として、全員の学生がホームステイを経験させていただいたこと、11月30日に行われた村での中間報告会で村の参加者からいただいたご意見を最終報告書に反映させていることがあげられる。一義的には教育目的の調査ではあるが、このようなカリキュラムを通じて、調査で多大な犠牲を払ってくださった村の方々との交流の促進や地域振興の活動に参画させていただけたことは望外の喜びである。

最後に、今回の調査にあたり、櫻井久江村長、村役場職員の皆様をはじめ、教育・福祉・経済関係諸団体のみなさま、村民各位、特にホームステイを受け入れて下さった皆様にたいへんお世話になりました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

名古屋大学大学院国際開発研究科

2007年度国内実地研修委員長

西川芳昭



櫻井久江村長と櫻井健係長











目 次

Contents

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
写真 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
2007 年度国内実地研修の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
1. 目的 · · · · · · 6
2. 本年度を含む実施実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
3. プログラム内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
4. 担当教官と参加学生の一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
5. 本書の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
清内路村の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
and Administrative Office A Case Study of Seinaiji Village · · · · · 33
第3章 清内路村における高齢化対策の現状とその行方・・・・・・・・・・・ 57
第4章 清内路村における教育の現状と取り組み 一英語教育・国際理解教育と中学校の統合— · · · · · · · · 79

2007年度 国内実地研修の概要

1. 目的

名古屋大学大学院国際開発研究科は、1995年以降、正規のカリキュラムの一環として国内実地研修(Domestic Fieldwork、略称 DFW)を実施している。DFW は、1992年以降本研究科で実施されている海外実地研修(Overseas Fieldwork、略称 OFW)をモデルに考案されたもので、これら二つのプログラムは本研究科が重視する実践教育の支柱となっている。

DFW の主な目的は、日本の地域開発をめぐる諸問題や町おこし・村おこしの取り組みについて現地調査を通じて学ぶことにある。本研究科の修了生の多くは国際開発・協力の実務や研究活動に携わっているが、将来、そうした職務に就く可能性の高い日本人学生や留学生にとって、日本国内での開発事例を学ぶことは発展途上国の開発問題を考える際にも非常に有益であると考えられるためである。そうした学習・調査活動を通して、参加学生が「開発現場」を知ることの重要性を実感すること、そして国際色豊かな構成員でのグループ活動を通して現地調査の基本的姿勢や方法を習得することもまた DFW の重要な目的となっている。

2. 本年度を含む実施実績

これまでの実施実績は下表の通りである。12 回目となる本年度の DFW は、長野県下伊那清内路村に受け入れをしていただいた。現地調査は 2007 年 10 月 23-25 日に実施され、参加学生は 4 つのテーマ別に分かれて、それぞれの視点から清内路村について多面的理解に努めた。本年度も例年同様、調査終了後に調査地を再び訪れ、結果報告をさせていただいた。それによって調査をお引き受けいただいた村民の方々に直接、調査結果のフィード・バックを行えたこと、そして村役場の方々を中心とする村民の方々に貴重なご意見やご指摘を賜ることができ、大変貴重な機会となった。なお本年度の参加学生は日本人学生 5 名と留学生 20 名の計 25 名で構成された。

■ DFW の実施実績

	年度	研修場所	参加学生数(内、留学生数)
1	1995 年	愛知県幡豆郡一色町	10 (4)
2	1996年	愛知県幡豆郡一色町	13 (8)
3	1997年	愛知県加茂郡足助町	19 (11)
4	1998年	愛知県加茂郡足助町	25 (14)
5	1999 年	愛知県渥美郡渥美町	36 (25)
6	2001年	愛知県南設楽郡鳳来町	23 (14)
7	2002年	岐阜県郡上郡八幡町	26 (18)
8	2003年	岐阜県加茂郡東白川村	36 (16)
9	2004年	岐阜県加茂郡東白川村	32 (15)
10	2005年	長野県下伊那郡泰阜村	31 (17)
11	2006年	長野県下伊那郡泰阜村	40 (19)
12	2007年	長野県下伊那郡清内路村	25 (20)

(注) 2000 年度は研修場所の諸事情により実施されなかった。

3. プログラム内容

DFW のプログラムは、事前研修、ワーキング・グループ (Working Group、以下、WG とする) ごとの調査準備、現地調査、結果報告会の4つの活動から構成される。

■ 事前研修

日時	講師	講義内容		
5月16日(水)16:45-18:15 <必須>	2007 年度 DFW 委員会 西川芳昭	「DFW の概要」		
5月23日(水)16:45-18:15 <必須>	2007 年度 DFW 委員会 西川芳昭	「日本の地方行政」「地域調査のマナー: これまでの経験から」		
5月30日(水)16:45-18:15 <必須>	清内路村役場 総務振興課係長 櫻井健様	「清内路村の概要」		
8月20日(月)-24日(金) <必須> 集中講義	国際協力銀行 技術顧問 鹿野和子様	国内実地研修特論 : 「日本の地域開発経験 の途上国への導入可能性」		

■ ワーキング・グループごとの調査準備

本年度は、参加学生各自の興味・関心に応じて、経済、行政、福祉、文化の4つのWGが設けられた。使用言語は日本語及び英語の両方とし、主に参加学生同士で翻訳や通訳を行った。6月から10月にかけて、各WGは担当教員の指導の下、調査準備を重ねた。それぞれの調査課題の設定、調査時の希望訪問先の選定、詳細な質問事項の作成や調査方法の検討作業を進めた。

グループ	調査課題
WG1 経済	本調査は、清内路村における農産品の生産量の増加・維持の方法、および観光客の 誘致方法を調査し、そのために清内路村にはどのような課題が隠れているのかを調 査する。
WG2 行政	□現在、村民と行政機関がどのような関係にあるのか、②行政機関が運営能力を改善するために、どのような努力を行っているか、③村民のニーズを行政に反映させるために、村民がどのような活動を行っているかの三点を調査する。以上を通じて、村民と行政機関の関係改善のための問題解決の可能性を探る。
WG3 福祉	本調査では、清内路村の高齢化対策を「医療」、「介護」、「施設・設備」の3つの観点から考察する。さらに、清内路村においての政策実施、医療・介護現場でのニーズ、それらを利用する高齢者の満足度を明らかにすると共に、合併やそれに伴う福祉政策の変化に対する高齢者の意識を知ることを本調査の目的とする。
WG4 文化	この調査の目的は以下の3点である。①清内路村中学校の合併においてどのような課題があるのかを明らかにしていく。②過疎地域における小中学校での英語教育、国際理解教育の現状を把握し課題を明らかにする。③過疎地域における保育園、小中学校において、村の伝統文化継承がどのように行われているかについて調査する。

■ 現地調査

泰阜村にて実施された3日間の現地調査の詳細は以下の通りである。本年度は、清内路村のご協力により、のべ9軒のご家庭でホームステイをさせていただく機会を得ることができ、より深く村の生活事情等について造詣を深めることができた。

10月23日 (火)

10 / 20 H (/C)						
		午前 10:00~12:00	昼食	午後 13:00~17:00		
WG1		10:30-12:00 福祉センター		13:00-15:00	15:00-17:00 村役場総務振興課	
				谷口醸造	(観光・商工・農政)	
WG2	10:00-	10:30-12:00		13:00-15:00	15:00-17:00	
	10:30	福祉センター		J A	村役場民生課	
WG3	太 松 心 提	10:30-12:00		13:00-15:00	15:00-17:00	
WGS	ご挨拶	福祉センター		村役場民生課	村役場民生課	
				保健衛生係	福祉係	
WG4		10:30-12:00		13:15-15:00	16:10-17:00	
W G 4		福祉センター		小学校(授業参観)	小学校(児童・保護者	
					インタビュー)	

10月24日 (水)

	午前9:00~12:00		昼食	午後 13:30~17:00		
WG1	9:00-10:30	10:45-12:00		13:30-15:00	15:15-17:00	
	峠の本陣	役場		福祉センター	役場 (品評会)	
WG2	9:00-10:30 10:45-12:00			13:30-17:00		
	村長・助役	議長・副議長		福祉センター		
WG3	8:30-12:00			13:30-17:00		
	福祉センター			デイサービスセンター	_	
WG4	8:15-15:00			15:00-16:00	16:10-17:00	
	中学校			バレーボール大会	福祉センター	

10月25日(木)

	午前9:00~12:00		昼食	午後 13:00~15:00	
WG1	9:00-10:30	11:00-12:00		13:30-14:30	14:30-15:00
	喜久水酒造 長田屋商店			ふるさと自然園	役場 (挨拶)
WG2	9:00-12:00			13:00-14:30	14:30-15:00
	一般住民へのインタビュー			教育委員会	役場 (挨拶)
WG3	9:00-12:00			13:00-14:30	14:30-15:00
	一般住民へのインタビュー			診療所	役場 (挨拶)
WG4	9:00-10:30	11:00-12:00		13:00-14:30	14:30-15:00
	保育園	小学校		教育委員会	役場(挨拶)

■ 結果報告会

結果報告会の詳細は以下の通りである。

項目	詳 細
日時	2007年11月30日(金) 13:00-15:00
場所	清内路村福祉センター会議室
出席者	櫻井久江村長をはじめ役場の方々や調査にご協力いただいた方々
報告者	DFW 参加者
内容	挨拶(西川芳昭 DFW 委員長) WG1·2 の報告(各 15 分間のプレゼンテーション) 質疑応答(約 15 分間) WG3·4 の報告(各 15 分間のプレゼンテーション) 質疑応答(約 15 分間) ご感想(櫻井久江村長) 挨拶(西川芳昭 DFW 委員長)

4. 担当教官と参加学生の一覧

以下の通り、計25名の学生が参加した。男性14名、女性11名の内訳となっている。

グループ	No.	氏名	コース	年度	性別	国籍
	1	小林大介 **	DID	M1	男	日本
	2	アブドラ・アンビヤ	DID	M1	女	インドネシア
	3	ネット・シーラ	DID	M1	男	カンボジア
1 経済	4	ジョン・カリャンタ *	DID	M1	男	フィリピン
(西川芳昭)	5	ダダジャノフ・シュラフト	DICOS	M1	男	ウズベキスタン
	6	李佳静	DID	M1	女	台湾
	7	グォン・セッティクン	DID	M1	男	カンボジア
	8	モハメッド・ヤスミン・サカリア	DID	M1	女	エチオピア
	1	ナム・スーティエン	DID	M1	女	カンボジア
	2	ブルハノフ・サイダフロル	DID	M1	男	ウズベキスタン
2 行政	3	鐘佩艻	DICOS	M1	女	台湾
	4	イム・クーン *	DID	M1	男	カンボジア
(藤川清史)	5	Vongxay Phanthawong	DICOS	M1	男	ラオス
	6	Nguyen Thi Ngoc Ha	DICOS	M1	女	ベトナム
	7	サイ・カイン・ミュートゥン**	DICOS	M1	男	ミャンマー
	1	密本洋海 *	DICOS	M1	男	日本
	2	高橋麻奈	DICOS	M1	女	日本
3 福祉	3	鈕飛	DICOS	M1	男	中国
(東村岳史)	4	申屠梁杰	DICOS	M1	男	中国
	5	スバン・ワーユ・エディ	DICOS	M1	男	インドネシア
	6	磯部仁美 **	DID	M1	女	日本
	1	神田すみれ **	DICOM	M1	女	日本
4 文化	2	李静	DICOM	M1	女	中国
(大名 力)	3	ガリヒ・ラマディタ *	DICOS	M1	男	インドネシア
	4	ルシアナ・プラバンダリ	DICOS	M1	女	インドネシア

⁽注) ** グループ・リーダー * グループ・サブリーダー

DID: 国際開発専攻、DICOS: 国際協力専攻、DICOM: 国際コミュニケーション専攻、M1:修士1年生。

5. 本書の構成

本書は、調査地である泰阜村の調査協力者をはじめ、国際開発・協力や調査研究活動に関係する約 150 もの国内の諸機関にも送付されている。日本の農村地域における開発事例の貴重な記録としても、本書が有効に活用されることが望まれる。

本書の構成は以下の通りとなっている。まず、本年度 DFW 委員長である西川芳昭が清内路村の概要をまとめている。以降はグループ別の報告書が順に続く。英語報告には和文要約が、和文報告には英語要約が添付されている。

なお、本書に示された見解、提言、批判などは筆者である学生のものであり、本研究科または 担当教官のものではない点にご留意いただきたい。

(文責 鈴木隆子)

清内路村の概要

今年度の国内実地研修を実施させていただいた清内路村は、長野県の南部、伊那と木曽の分水嶺にあたる下伊那郡の西端にあり中央アルプス南部に位置し、面積約 44km²、人口713 人(2007 年 11 月 30 日現在)の村である。日本の各地に、そして特に長野県に多く存在する過疎の村の一つであるが、その規模や条件不利性においてほかの村と比べても非常に厳しい条件下におかれている。

清内路村は、地理的に、その東は飯田市、南及び西は阿智村、北は木曽郡南木曽町に接し、海抜は 640m から 1,636m と非常に標高差の大きい地域である。村域はすべて天竜川水系であり、阿知川の支流である黒川と清内路川が村の中央で合流し、南流する。集落は大きく分けて上清内路と下清内路に分かれ、標高差もあることから多少気候条件も異なり、それぞれ独自の文化を持っている。集落から梨野峠を越える伊那街道清内路道は、水戸浪士一行の通過もあったといわれている。さらに、明治維新前は徳川氏の直領(天領)で、美濃の国久々里代官千村平右工門の支配下にあり、県境を越えた交流の源泉をここに見出すことができるとも考えられる。

特産の煙草の行商に出かけた村人が、花火製造の秘法を三河地方から入手してきたことにはじまる、手造り花火は県無形民俗文化財に指定されており、上清内路の諏訪神社で毎年10月6日、下清内路の諏訪神社では9日に奉納されている。このように、江戸時代から残る伝統文化が今に息づく村でもある。

行政としての村の歴史は平成元年に 100 周年を迎えており、現在隣村阿智村との合併の協議が行われているが、地域のアイデンティティーが色濃く残る地域でもある。1995 年から 2000 年にかけて村の人口は約 12.1%減少しており急速な過疎化が進んでいることがわかる。2000 年国勢調査では、世帯数 274 世帯のうち世帯人員が 1 人の世帯が 59 あり、間借りや独身寮世帯がないことからその多くが独居老人であると考えられる。少子高齢化に伴う、福祉サービスの問題、中学校の合併などが村の現在の課題である。

伝統産業としては葉タバコの生産と養蚕が盛んであったが、時代の変化に伴い過疎化、高齢化が進んでおり、後継者が見いだせない状況である。2000年の農林水産省世界農林業センサスによると農家数は69戸で、その多くは自給的農家で、販売農家は16戸(1990年は22戸)にとどまっている。またそのうち13戸までは耕地面積が0.5ha未満で、残りの3戸も1ha未満である。耕地面積は27haで、そのうち24haが畑、残りの3haが田である。農家人口は239名であるが、基幹的農業従事者は13名(1990年は40名)でうち65歳未満は女性1名のみである。このような農業構造の中、新しいカブの品種である「清内路あかね」とミョウガが村の特産品となっており、特にあかねは焼酎への加工によって注目を浴びている。

村をほぼ南北に国道256号線(中津川、茅野線)が走り、飯田と木曽地方を結んでいる。

これを基幹として道路網の整備が進んでおり、名古屋市内から 1 時間半程度で訪れることのできるこの村は、観光客の誘致、I ターンの募集も積極的に行っている。特色のある事業として、息づく自然と伝統の村「清内路村」をキャッチフレーズに清内路村民とともに「ありのままの清内路」を楽しみながら、「これからの清内路」を考えていく新たな村人(登録制の特別村民)を全国から募る「清内路ビレッジャー」(villager:英語で「村人」の意)事業などが試みられてきたことも特筆できよう。

財政的には今後とも厳しい状況が続くと考えられるが、その状況の中で行政と村民が一体となったさまざまな取り組みが行われており、わが国の地域開発のみならず、開発途上国における地域開発・コミュニティ開発について学びともに考える場として大きな可能性を秘めている村であると考えられる。

参考文献

清内路村ホームページ: http://www.seinaiji.jp/

清内路村商工会ホームページ: http://www.mis.janis.or.jp/~seisyo/

文責:西川芳昭